

水をめぐる


ものがたり

わたしたちの暮らしのそばには、
いつも「水」があります。

食を支え、文化を育み、

ときには災害を起こす「水」と、

わたしたちは共生してきました。



しかし近年、水不足、水害、
水質汚染など、水を巡る問題が
大きくなってきています。

水にまつわる様々なトピックから、
わたしたちの暮らしを支える
「水」について考えます。

世界の水ストレス予想図



水は国家の安全保障

持続可能な水循環を目指せ

吉村 和就 (よしむら かずなり)

グローバルウォータ・ジャパン代表。日本水フォーラム理事。大手エンジニアリング会社にて国内外の水ビジネスに携わり、国の要請により国連本部社会経済局で発展途上国の水インフラ指導を行う。2001年NY同時多発テロの後、帰国しグローバルウォータ・ジャパンを設立、関連業界誌やNHK、フジテレビ等、多くのマスコミで水の啓蒙を行い、最近では若手の教育に情熱を注いでいる。



人類は水に生かされてきました。文明は四大大河から始まり、メソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明、黄河文明など、すべて大きな河（大河）の流域に発達しました。それは、飲料としての命の水はもちろんのこと、最大の理由は食糧となる作物の栽培に水が不可欠だったからです。しかし産業革命以後に、世界人口の増加、産業・工業などの進展により温暖化ガスの排出が地球規模に広がり、その地球温暖化の影響が、すべて水の姿となって我々の前に現れています。洪水、干ばつ、海面上昇、異常気象の頻発など、国や地域を問わず毎日のように報じられています。このまま温暖化が加速すると、地球人口80億人の約半分40億人が2030年までに水不足（水ストレス）に直面する予想も出ており、まさに水問題解決は、国家の安全保障に直結しています。

地球温暖化による 国家・地域の損失

地球温暖化（気候変動）により、気温の高い状態が長期化すると、自然界のバランスが崩れ、それにより国家の経済損失や地球上のあらゆる生態系に多くのリスクがもたらされます。平均海面の上昇、暴風雨の激化、干ばつ、洪水の増加など、国、地域によりリスクの度合いが著しく異なっています。具体例として、以下2つのような例があります。

1 エルニーニョ現象による 経済損失は3兆ドル

南米ペルー沖の海水温が上がる「エルニーニョ現象」だけでも、世界における経済損失は2029年までに3兆ドル（約450兆円）に上ると見積もられています。（米・ダートマス大学）

2 欧州の温暖化被害

欧州委員会は、昨年8月の観測報告書で欧州のほぼすべての河川で、水位が下がるなど、過去50年で最悪の渇水状況が続く、欧州大陸の47%が干ばつの



国連 2023 水会議・開会式
(筆者撮影)



影響を受け、農作物収穫の減少、国際河川を利用した物資の舟運量の減少、火力・原子力発電所の稼働率低下（河川水を冷却水として利用）、さらに山火事の頻発を引き起こしているといった被害状況を記載しています。もちろん、これらの事象は世界的な地球温暖化が主因とされています。



国連の動き

国連は、国際的な水管理について重要な役割を果たしています。今年の3月には「国連2023水会議」がニューヨーク市で開催され、①国際的な水政策の推進、②水資源のモニタリングと評価方法、③水に関する国際的な協力と枠組みの整備、④水不足や水資源の脆弱性への対処方法、⑤水の平和と安全保障、⑥水に関する技術支援と協力の強化などが話し合われました。

日本水フォーラムの活動

日本水フォーラムは、国内外の水問題解決を目指した「政策提言」、途上国における水・衛生環境の改善の「草の根活動の支援」、長年にわたり日本で培われてきた技術、経験、ノウハウを伝える「日本の叡智の世界への発信」、さらには次世代につなげる「人材育成・啓発」を4本の柱に、国内外で多様な活動を展開しています。2022年はアジア・太平洋水フォーラム（第四回アジア・太平洋水サミット、熊本市で開催）で主体的な支援活動を行い、今年3月には上記の「国連2023水会議」で日本から情報発信（ユース活動を含む）を積極的に行いました。



天皇陛下のビデオメッセージ
第四回アジア・太平洋水サミット会場（筆者撮影）

次世代に向けての行動策

持続可能な水の管理は、将来の世代にも安定した水供給を確保するための重要なアプローチです。①水資源の保護と保全、②水の効率的な利用、③水の品質管理、④水資源の統合的な管理、⑤水資源のモニタリングと評価、⑥水に関する教育やリテラシー向上などを積極的に進めることが急務です。しかし、「水に関する持続可能な管理は、国や地域により大きく異なる」ので、地政学の歴史を踏まえ、長いスパンで考えて行動すべきでしょう。



ユース代表と関係者・国連本部エントランスにて、国連 2023 水会議（筆者撮影）

気候変動が 水と生活にもたらす変化

大雨と洪水の増加

2023年の夏は記録的な暑さでした。気象庁によると1898年の統計開始以来、夏の平均気温が最も暑かったそうです。近年の気候変動によって、世界の各地で最高気温の記録が更新されていますが、地表付近の気温が温かくなると、地球上の水の循環も大きく変化します。たとえば、空気に含

まれる水蒸気の量は、その空気の温度が高くなるほど多くなりますが、そのために、短時間の強い雨の量が増えていくことが世界中で観測されています。2021年から2022年に発行された最新の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）による報告書によると、ある程度、長期間の観測データがある陸域のほとんどでは、1950年代以

降に大雨の頻度と強度が増加していることが報告されています（図1）。この、「温かくなると水蒸気が増えて、大雨が増える」ことで、日本やアジアを含む世界の多くの地域において、洪水が増えることが予想されています。温暖化によって大気中に含まれる水蒸気の量が増えると、以前よりも洪水が生じやすくなったり、いったん生じた場合には、より被害が大きくなります。最近では、過去の気候の数値シミュレーションを多数実行することによって、過去に災害をもたらした大雨や洪水が、人間による温暖化が原因でどの程度増えていたのかを調べる研究が進んでいます。たとえば、日本に大きな災害をもたらした2019年の大雨は、温暖化によつて1割以上、雨の量が増えたことや（Kawase et al. 2020）、近年に発生した世界の洪水は、温暖化によってその発生確率が増えていたことが明らかになっています（図2）。地球温暖化を考慮しなければ、東アジアの沿岸部において台風による大雨の発生が顕著に増加した理由が説明できないことも示さ

平林 由希子（ひらばやし ゆきこ）

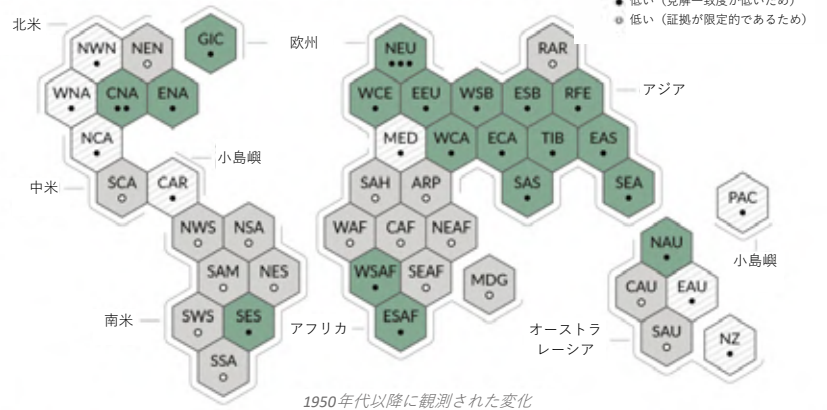
芝浦工業大学工学部土木工学科教授。専門分野は気候変動による地球規模の水循環、水災害、水資源の予測と適応。国連の「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」の海洋と雪氷圏に関する特別報告書の2章および政策決定者用要約の主執筆者、第6次評価報告書第2作業部会の4章および政策決定者用要約の主執筆者を務めた。



図1

PCC 第6次評価報告書第1作業部会
政策決定者用要約の図
SPM.3より（気象庁仮訳版）

(b) 世界中の地域で観測された大雨の変化と、その変化に対する人間の寄与に関する確信度の統一的評価

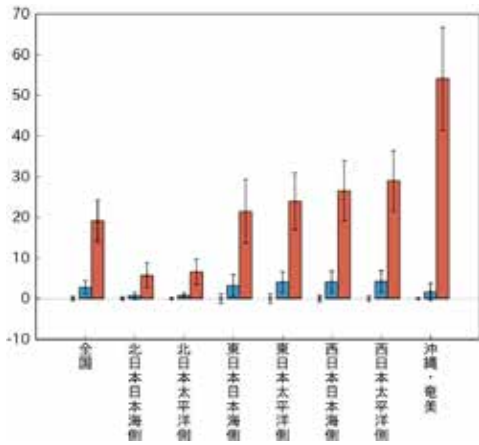


【参考文献】

Alifu, H., Y. Hirabayashi, Y. Imada and H. Shigoma (2022) Enhancement of river flooding due to global warming, Scientific Reports 20687.
Kawase, H., M. Yamaguchi, Y. Imada, S. Hayashi, A. Murata, T. Nakaegawa, T. Miyasaka and I. Takayabu (2021) Enhancement of extremely heavy precipitation induced by Typhoon Hagibis (2019) due to historical warming, SOLA 17A, 7-13.
Utsumi N., H. Kim (2022) Observed influence of anthropogenic climate change on tropical cyclone heavy rainfall, Nature Climate Change 12, 436-440.

図3

気象庁の予測による1地点あたりの無降水日
(日降水量が1.0 mm未満の日)の年間日数の
将来変化(日)



将来変化量(日)を棒グラフ、年々変動の幅を細い縦線で示す。棒グラフの赤色が21世紀末に約4°C上昇するシナリオ、青色が約2°C上昇するシナリオに対応する。棒グラフが無いところに描かれている細い縦線は、20世紀末の年々変動の幅を示す。(文部科学省及び気象庁「日本の気候変動2020」より引用)

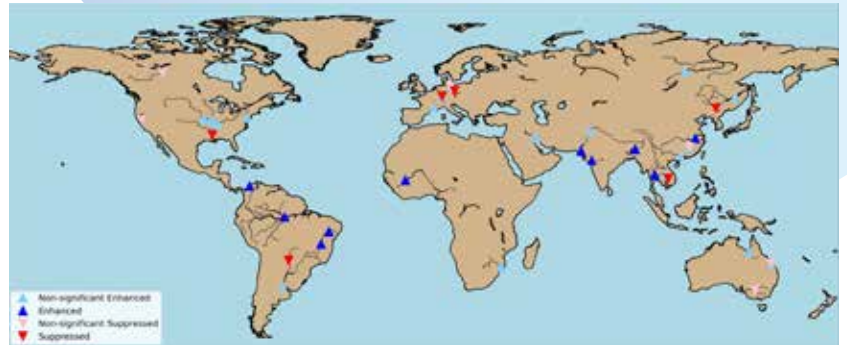
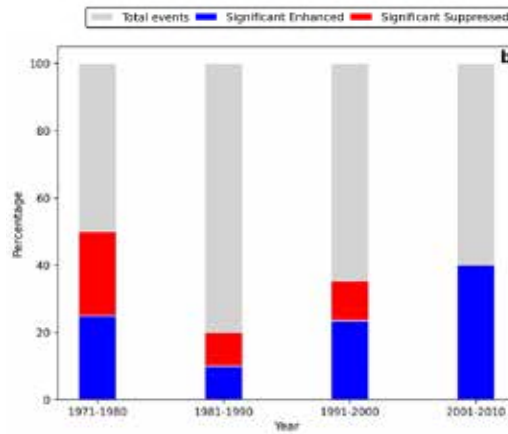


図2

上: 過去(1961-2010)に生じた洪水の、気候変動による発生確率の変化。青が増加、赤が減少を示し、濃い青または濃い赤は有意な変化を示す。

下: 年代ごとの、過去の洪水の発生確率への気候変動への影響(全発生件数における増加(青)と減少(赤)の割合)。(Alifu et al., 2022)



れました(Utsumi and Kim, 2022)。

都市では、大雨が増えると、下水道などに流すことができずに水が溢れる「内水氾濫」という洪水が増えることが心配されています。東京都では、これまで、1時間50mmまでの降水の場合、安全に水が流せるように下水道の整備を行ってきましたが、気候変動による将来の大雨の増加に備えるために、この値を75mmに引き上げるということが発表されました。河川の水が溢れる洪水に対しては、現在の河川堤防などの高さを決める基準に使う計画のための降水量が決められていますが、国土交通省は、数値シミュレーションから得られた気候変動による将来の降水量の増加分を将来の計画に考慮する方針を発表しました。河川洪水の被害を最小限におさえるために、流域全体で備えるという「流域治水」という考え方も新たに提案されています。

水資源への影響

気候変動は、私たちが使える水資源

量にも大きな影響を与えます。同じ雨量

が降ったとしても、気温が高くなると蒸発散量が増えるので、使える水の量は減少します。また、冬に降る雪が温暖化によって雨として降るようになることで、田植えの時期に自然のダムとして水資源を供給してきた山地の雪が減ります。気候変動によって極端な少雨が増えることも危惧されています。気象庁の統計では、日本では雨が降らない日が過去100年あたり9.5日増えていることが報告されており、将来も雨の降らない日数が増加することが予測されています(図3)。日本付近の地域単位の少雨の予測は不確実性が大きいですが、農業や工業、または生活に必要な水を安定的に確保するために、気候変動の影響の影響も考慮していく必要があります。

気候変動の水循環への影響は大きく、すでに多くの地域で影響が出始めています。温室効果ガスを減らす緩和策だけでなく、変化に対する適応策も迅速に進めていく必要があります。

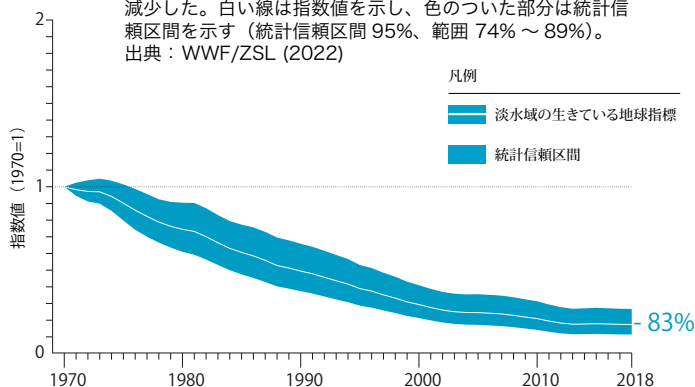
「つながり」で考える 世界の水と日本の暮らし

並木 崇 (なみき たかし)

(公財)世界自然保護基金ジャパン (WWF ジャパン) 自然保護室・淡水グループ長。前職ではランドスケープ計画・設計に従事。2016年からWWFジャパンで国内グループ長として責任ある農業を通じた水環境保全プロジェクトを担当。2020年から現職。企業との協働による国内外の水リスク低減と淡水の生物多様性保全プロジェクトを担当している。



淡水域の「生きている地球指数」(1970年～2018年)
地球全体の淡水種 1,398種、6,617の個体群は、平均83%減少した。白い線は指数値を示し、色のついた部分は統計信頼区間を示す(統計信頼区間95%、範囲74%～89%)。
出典：WWF/ZSL (2022)



淡水域の野生生物は、水量の減少や汚染、水辺環境の改変によって生存を脅かされている。

ブラジルのセラード。大豆などの国際的な需要を受けて、写真右側の様に大規模に農地に転換されている
© Adriano Gambarini WWF-Brazil



深刻な世界の水課題と 日本は無関係なのか

地上のあらゆる生命の土台として、また人の暮らしを支える最も基本的な資源として、欠かすことのできない「水」。今、大規模な開発や、水資源の乱用、汚染物質の排出に加えて、気候変動などの影響により、世界の各地

で人と自然にとつて重要な水環境が危機にさらされています。この水環境の危機は、多くの野生生物を絶滅の危機に追い込む原因となっているのみならず、農業や工業など人間の営みにも欠かさない水資源自体が、深刻な危機にあることを警告しています。

さて、この危機は日本と無関係なのかでしょうか。

実は、日本は世界第5位の輸入大国であり、衣類、農産物類、精密機器類

など、皆さんの生活に必要なものも多くも海外の国々で生産・製造されてから輸入されています。そして、日本が生活の中で利用している日用品を生産する海外の現場では、深刻な水不足、水質汚染、洪水、安全な水と衛生環境の悪化、そして生物多様性の劣化が生じているケースもあります。

豆腐や納豆など、日本でなじみの深い食品の原材料である大豆を例にとってみましょう。大豆の主な産地の一つである南米大陸のブラジルにあるセラードでも、日本を含む世界的な需要拡大に合わせて、農地拡大・大豆生産の増加が急速に進行中。この大陸に残されていた貴重な自然が農地開発などによって広く失われ、川や湿地などの水環境にも大きな影響を及ぼしています。つまり日本を含めた輸入国・消費国によってブラジル・セラードの水環境への影響を及ぼし、生物多様性にも影響すると懸念されています。このような考え方は、ウォーターフットプリントと呼ばれる原材料の生産、リサイクルまでのライ



© Frederico Viana / WWF



© R.Isotti, A.Cambone / Homo Ambiens / WWF

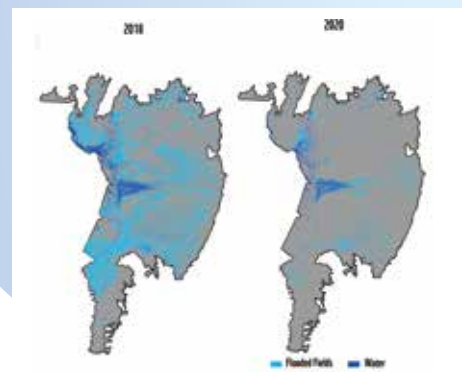
乾季と雨季の極端な水環境の変化によって多様な淡水魚が育まれ、淡水魚を目当てに多くの鳥類やジャガー、オオカワウソ、パラグアイカイマンなどが集まってくる。



地球の裏側が受ける影響が生物多様性にも

フサイクル全体で直接的・間接的に消費・汚染された水の量を定量的に算定する手法もあります。

セラードにはパンタナールという多様な野生動物の生息地としても有名な世界最大級の大湿原が隣接しています。その広さは日本の本州に匹敵し、1年間で全く違う水の表情を見せてくれます。一つは川が氾濫して地面のほとんどがどっぷりと水に浸かってしまう雨季で、もう一つは水が引き、ところどころ川や池に水を残す以外は全て草地となる乾季です。実はこの極端に季節で変



ブラジルのパンタナールにおける水域の変化(2018年と2020年)。雨季に水に浸かる範囲(水色)が2020年には大幅に減り、淡水魚が減少し鳥類や他の野生生物も減少したと言われている。出典 Mapbiomas2022

わる水位差が淡水魚の産卵などのきっかけとなるなど、豊かな生物多様性を育んでいるのです。

こうした豊かな生物多様性は、人にも大きな恩恵をもたらしています。地域のレストランに行くと、さまざまな種類の淡水魚を使った料理が数多く提供されており、人にとって自然がいかに重要なものかを実感できます。しかし、大豆畑の拡大などによって近年は自然の植生が減少し、結果として雨季に水に浸かる範囲も急激に減少しています。

こういった自然と水の変化に関係しているのが、ブラジルから大豆を輸入している、日本を含めた海外の国々の消費なのです。

このように輸入を通じた「つながり」でみると、日本の生活と深刻な状況に置かれている世界の「水」は無関係ではないということがわかってきます。

近年はさらに、気候変動の影響によって、水不足や洪水などの被害も深刻化するようになりました。輸入によって世界の水と密接につながっている日本に住む私たちは、こうした問題をどのよ

うに考えてゆけば良いのでしょうか。世界のさまざまな自然環境、そしてそこに息づく多様な野生生物の保全に取り組むWWFは、健全な「水」を守る上で、淡水の母体となる自然環境を保全することが最も重要だと考えています。なぜなら水は蛇口から生まれるのではなく、安定した気候と、水源となる森や湿地、その流れで潤いをもたらす河川など、自然環境のつながりの中で育まれるものだからです。

心強いことに、私たちの生活を支える衣類や農産物類、精密機器類を届けてくれる海外企業の中には、こうした水環境を守るため、自分たちのビジネスでの水の使い方を見直すだけではなく、森や川などの保全にも取り組む例が出てきています。

私たちWWFは、こうした水でみるつながりにも注目しながら、世界の流域の自然と共に、人自身の暮らしを守っていく——そのために、一つ一つの環境保全の取り組みを、日本企業や地域などさまざまな人々との協働により実現させたいと考えています。



「みずからかんがえる」 持続可能な社会をつくる 水教育

学校で雨を貯めて ロケットを飛ばそう

いま僕は小学4年生といつしよに雨を集めています。4年生は夏休みにペットボトルロケットをつくって遊びました。とても楽しかったようです。その後、水不足が心配されるようになり、メディアは節水を呼びかけました。子どもたちは

小学4年の理科には「雨水のゆくえ」という単元がありますが、そこで習った知識を実際に使います。最初は校内を探検し、降った雨がどこに溜まるか、どこへ流れるかを観察し、図面にまとめました。駐車場や体育館のまわりは

「ブルーシートで雨を集める」グループもありました。斜めに設置したブルーシートからポリタンクに雨を流すしくみです。子どもたちは雨の日を心待ちにしています。

橋本 淳司 (はしもと じゅんじ)

水ジャーナリストとして水に関する情報を発信。アクアスフィア・水教育研究所代表として学校で水環境教育を行う。武蔵野大学客員教授。Yahoo! ニュース個人オナー（2019年オナーワード受賞）。著書に『水辺のワンダー』『100年後の水を守る』（文研出版）など。1967年、群馬県生まれ。



学校内の雨の動きをマッピングする

子どもたちが作成した
雨を貯める装置



「もう1度ペットボトルロケットを飛ばしたいけれど水道水は大切にしたい。ではどうしようか」ということで、総合の時間に「雨水プロジェクト」が始まりました。

4年生は雨をつかまえる場所を探しました。あるグループは、雨上がりに木の幹が濡れているのを見て、「もしかしたら葉っぱから枝へと流れた雨粒は幹へとつたわって地面に染み込むのではないか」「それなら幹に水を受け止める装置をつくつたらどうか」と考えました。

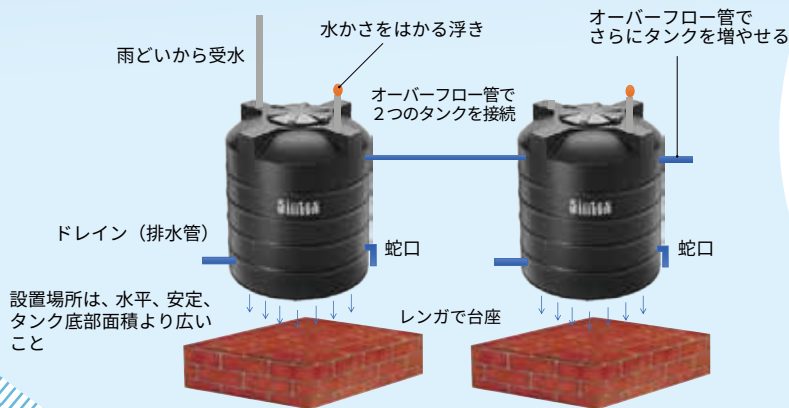
「ブルーシートで雨を集める」グループもありました。斜めに設置したブルーシートからポリタンクに雨を流すしくみです。子どもたちは雨の日を心待ちにしています。

アスファルトで固められ、降った雨は排水溝に入っていきます。屋根に降った雨は雨樋を通じて下水管に流れていきます。学校を洪水から守る設備がいろいろあることに気づきます。いまでは忘れ去られた小さな雨水タンクもありました。タンクは一杯でしたが、近くにある学校農園の水やりには水道水が使われていました。校庭もじっくり見ると高いところと窪んだところがあり、雨上がりの運動会で、雑巾で水を吸い取ったことを思い出しました。



タンクの設置位置の高さ

- 高い位置に設置すると、水は位置エネルギーをもつので、ホースなどで遠くまで届かせることができる
- あまり高い位置に設置するとメンテナンスが難しくなる



(c) アクアスフィア・水教育研究所

雨水を使った 持続可能な暮らし

数年前、インドの小さな集落で雨水活用の手伝いをしたことがありました。村の人によると、年々井戸の水位が下がり、海沿いでは塩分が混じるとのことでした。「原因は大規模な森林伐採」という人もいました。かつて家屋は土、木、牛糞でつくられていましたが、煉瓦の家が推奨され、日干し煉瓦をつくる

ための燃料として木が切られたというのです。山から雨が染み込みにくくなったのかもしれない。

村で驚いたのは雨期に大量の雨が降ることでした。年間に2100ミリの雨が降るのですが、6月下旬から9月初旬に2000ミリが集中し、残りの時期はほとんど雨が降りません。柔らかな青い草が広がる風景は、乾いた黄土の世界が変わります。作物がつかれなくなるので都会に出稼ぎに行く人も多く、そのタイミングで子どもが学校を止めてしまうことも多いと聞きました。村の若者から相談を受け、雨水の活用を提案しました。若者たちは「雨水は使えるのか」と驚いた様子でした。確かに空気中の汚れとともに降ってくる「降り始めの雨」は汚いのですが、その後はきれいになります。

アがありました。最終的に地面に穴を掘り、遮水シートを貼って貯水槽をつくる方法と、プラスチック製のタンクに水を貯める方法の2つが残りました。

石油製品のタンクの使用を反対する意見もありましたが、「村の人に雨水を使えるしくみを見てもらったほうがよい。1号機は教材でもある」と考えました。材料は近くの市場で揃えました。そうすれば自分たちで修理することができ、2号機をつくることもできます。雨は屋根から集めますが、市場には雨樋がありませんでした。そこでU字形の材料を加工し、塩ビパイプと組み合わせてつくりました。これまでは年間通して井戸水を使っていたのですが、雨期には雨水を積極的に使い、乾季には井戸水とタンクに貯まった水を併用しています。

水は必要不可欠な恵みであり、ときには洪水を引き起こす脅威でもあります。みずから学ぶ機会は身の回りにたくさんあります。外へ出て体を動かし、暮らしをみずから改善していきます。

日本一の湖と ともにある暮らし

琵琶湖版 SDGs・マザーレイクゴールズの取組

三和 伸彦 (みわ のぶひこ)

滋賀県理事（琵琶湖政策・MLGs推進担当）。MLGs 案内人幹事。化学技術職として滋賀県庁に入庁以来、環境学習を含め環境行政全般を歴任。平成9、10年度には環境庁（当時）に outward。近年では、マザーレイク21計画、滋賀県環境総合計画、琵琶湖保全再生計画、MLGsの策定等を担当。プライベートでは北近江のタウン誌「長浜み〜な」の編集にも関わる。



自然と人が共生する琵琶湖の内湖・西の湖の風景

日本一の湖・琵琶湖と 人々の暮らしの歴史

琵琶湖は我が国最大の湖で、その起源は40万年前にまでさかのぼることのできる世界でも数少ない古代湖の一つです。その長い歴史の中で、60種を超える固有種を含む1000種以上の動植物が生息する自然生態系の宝庫でもあります。また、琵琶湖は近畿1450万人の生活や産業活動を支える貴重な水源であると同時に、下流淀川の洪水を防ぐ役割を果たし、水産資源、観光資源として、また、人々に潤いや安らぎを与える心の支えとして幾多の恵みを私たちに与えてくれています。

琵琶湖のほとりにはいくつかの小さな「内湖」があります。その一つ、近江八幡市にある西の湖では今も漁業やヨシ産業が営まれ、秋のヨシ刈りや早春のヨシ焼きなどにより景観の維持と再生が繰り返されています。

一方で人々は、たびたび引き起こされる洪水や日照りをおそれ、水と神とを

敬う祭事を脈々と継承してきました。豊穰を願う祭りや伝統行事とも深くかわりのある「鮒ずし」をはじめとした湖魚のナレズシなどの伝統的な郷土食は、今も暮らしの中に伝承されています。ただ、こうした自然と共生した暮らしは、高度経済成長期の1960年代から1970年代にかけて、大きく変わりました。人口が増加するとともに生活排水や工場からの排水、農業排水などが増え、その結果、琵琶湖の水質が悪化し、1977年には大規模な淡水赤潮が発生したのです。

しかし、その後、石けん運動や下水道の整備、工場排水処理の推進、肥料や農薬の削減など、県民、企業、行政をはじめ様々な人たちの立場を超えた努力によつて、それらの課題の多くは改善の方向に向かっています。その一方で暮らしと琵琶湖の関わりは徐々に薄れてきているのもまた事実です。

また、近年では、アユやセタシジミなど、在来魚介類の減少が見られるほか、気候変動に伴う温暖化の影響などによ



MLGsにつながったマザーレイクフォーラム・びわコミ会議での話し合い

【参考】

- ・マザーレイク 21 計画（第 2 期改定版）（2011.10）
- ・マザーレイクゴールズ（MLGs）アジェンダ（2021.7）
- ・日本遺産ポータルサイト
「琵琶湖とその水辺空間～祈りと暮らしの水遺産～」ホームページ



り、琵琶湖北湖では冬に表層付近の水が冷やされて湖底まで沈み込む「全層循環」が完了しない現象が初めて観測されるなど、琵琶湖の問題は複雑化、多様化し、新たな局面に入っています。こうした琵琶湖と人々の暮らしの関係について、私たちは、「琵琶湖は『私たちの暮らしを映す鏡』であり、『地球環境を見通す窓』である」と表現しています。

琵琶湖版のSDGs・マザーレイクゴールズ

そうした中、2021年7月、琵琶湖版のSDGsであるマザーレイクゴールズ（MLGs）が、多くの皆さんの協力によって策定されました。MLGsは「琵琶湖」を切り口とした2030年の持続可能社会へ向けた目標（ゴール）です。一見、SDGsと似ていますが、その成り立ちのルーツはSDGsが制定される4年前、2011年にまでさかのぼります。当時、県が策定した「マザーレイク21計画（第2期）」に基づいて、「マザーレイクフォーラム・びわコミ会議（以下、「びわコミ会議」）が開催されるようになりました。

びわコミ会議では、年代や性別、所属、価値観などが異なる人同士、また異なる地域に住まう人同士が琵琶湖の現状やこれからについて対話を重ね、会議の最後に、次の一年間に琵琶湖のために出来ることを「びわ湖との約束」として参加者全員が表明してきました。こうして10年にわたるびわコミ会議で集

めた「びわ湖との約束」が、MLGsの基になっています。

滋賀県では、琵琶湖で清掃活動をする人も、カヌーを楽しむ人も、鮎寿司を愛する人も、水防団として水害に備える人も、みんな琵琶湖が大好きです。誰かに言われなくてもそれぞれの思いに基づいて琵琶湖にやさしい行動をしています。なので、例えば、2015年にCOP21で合意されたパリ協定のように、それぞれが貢献出来ることで参加できる仕組みがあれば、豊かで美しい琵琶湖を次世代に引き継ぐ推進力にしていくのではないかと考えました。ちょうどSDGsが広まってきた頃だったので、それを琵琶湖版のSDGsという形にしてまとめていくことになったのです。

マザーレイクゴールズの取組はまだまだ始まったばかりです。でも、「身近にある環境を、お母さんを愛するように大切に」「自分に出来ることで誰もが参加できる」というコンセプトは、実は持続可能な社会に向けた世界共通のモデルと言えるのではないかと私たちは考えています。